



Title	特集「アイヌ民族に対するマイクロアグレッション」：序論 民族共生を日常に根付かせる
Author(s)	北原, モコットウナシ
Citation	アイヌ・先住民研究, 3, 1-2
Issue Date	2023-03-01
DOI	10.14943/Jais.3.001
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/88278
Type	bulletin (article)
File Information	03_3_Kitahara.pdf



[Instructions for use](#)

特集「アイヌ民族に対するマイクロアグレッション」

序論 民族共生を日常に根付かせる

Special Feature: Microaggressions against the Ainu People introduction Rooting ethnic coexistence in daily life

北 原 モコットウナシ

本特集では、大学やアイヌ民族に特化した研究・教育機関で、日常的に発生する抑圧（マイクロアグレッション）を、3人の著者が論じる。マイクロアグレッションは、露骨な悪意を伴わず、多くの場合無意識に、あるいは冗談の形をとって伝えられる軽視や攻撃を含む態度のことである。それは、ふとした時に表情や声色、仕草、短い言葉などによって瞬間的に伝えられるため、被害者が被害を受けながらもそのことを知覚しづらい点に特徴がある。そのために、問題化し解決の糸口を見つけることも難しいが、その一方で労働環境を確実に悪化させ、心身に与える悪影響は決して軽視できないと言われる。

マイクロアグレッションが悪意を伴わないとは、言い換えれば人々が持つ「常識」的感覚の中に、マイクロアグレッションを起こさせる要因があるということでもある。そしてマイクロアグレッションをする人は、決して特殊な差別者ではなく、ごく普通の人々だということでもある。

するとどういふことが起きるか。ある環境にマジョリティとマイノリティが9対1の割合でいたとすれば、マジョリティに取っては1度マイクロアグレッションをしたに過ぎないとしても、マイノリティは9人から被害を受けることになる。実際には、マジョリティの比率はもっと高い。また、職場に理解者がいないことによる絶望感はより小規模な環境でも起こる。しかし、その感覚や影響は当事者でなければ想像することが難しい。

このように日常的に起こることでありながら、こうした問題は、ことアイヌ民族に関する研究領域ではほとんど知られていないものであり、金（2016）や文（2021）などの先行研究はあるが、更なる進展と蓄積が求められる。本特集では、北原が大学における事例を、北嶋と杉本が民族共生象徴空間ウポポイその他の教育機会における事例と、その問題点、望まれる対応について述べる。北原が取り扱うのは、同じ職場内で発生する事例であり、特に学生から教員という、一般的には弱者とされる立場から強者に向けて発せられるケースもあることを示す。北嶋と杉本は、施設などを利用する外部からの訪問者による事例を扱い、北嶋は主として博物館やその他の講座などでのケース、杉本は民族共生公園の施設で起きているケースを紹介する。本特集で紹介する事例や問題は、これらの機関に限らず、類似の環境で起こるケースや対策を考える上でも参考となると考える。なお、本特集で事例を公表する目的は、問題が起こる状況と対策を検討することであり、マイクロアグレッ

ションを行った者を特定し、非難することにはない。また、被害者が特定されることにより、新たな被害を生じる懸念もある。そのため、加害者・被害者のプライバシーに配慮し、各事例の細部には、問題の理解に差し支えない程度に情報の変更や省略をしていることを、あらかじめお断りしておく。